

講 評

第 42 回展を迎えた本展は、創造性あふれる作品が昨年よりも多く出品され、全作品を入選として展示しています。今年度の特色は、独創的な発想や粘り強い集中力が作品全体に感じられる高密度なものが多かったように思います。子供達のアクティブな主題への取り組みとそれを粘り強く支援する新しい教師像が感じられました。

「アクティブ・ラーニング」という言葉が、中央教育審議会の答申に登場したのが 2012 年。野田内閣から現在の安倍内閣に受け継がれた教育改革の始まりと言えます。ようやく日本もヨーロッパやアメリカが実践してきた「未来の人間教育」に気づいた時点と言えます。日本の教育は明治の学制発布（明治 5 年）以来、教師主導の「読み、書き、そろばん」が主流で、今日でも「主要教科」と呼ばれ、1978 年には理科、社会、英語を加えた「大学共通一次試験」を実施。その後「大学入試センター試験」と名称を変更し、マークシート方式の知識量測定形式で人間の能力を測定することを続けています。その結果はパワハラ、いじめ、不登校、やる気のない子供等々、もはや教育先進国からは遠くなる話題が毎日のテレビやマスコミの主要な報道になっています。

こんな状況を打破する為に「アクティブ・ラーニング」という言葉が学校教育に一方的に要求された背景と思います。しかし、ヨーロッパでは第一次大戦後、多くの研究者が加わり、幼児から高齢者まで、生涯学習をアクティブに行うことが国づくりの課題となり、第 32 代ルーズベルト大統領が取り組んだ芸術家の独創性を生かした、「ニューディール政策」は今日の大国アメリカの基盤となっています。この様に世界の教育は、戦前からアクティブ・ラーニングを主軸にした教育実践が当たり前で、多くの学者がその実践を理論付けしてきました。例えばオーストリアのフランツ・チゼック（1865－1946）、ローウェンフェルド（1903－1960）、イギリスのハーバード・リード（1893－1968）等は、今日のアクティブ・ラーニングの提唱者であって、その教育方法は、芸術的表現を最優先している研究者が多いことに日本人は未だ気づいていないようです。

『自己表現の活動は教えようがない。技法にしる、形式にしる、
およそ外部的標準を適用すると直ちに抑制が生じ、全目的を挫折させる。
教師の役割は、〈付き添い〉〈案内役〉〈鼓舞者〉〈精神的助産婦〉である。』

『芸術による教育』 著作 H. リード （1959 年 日本で出版）

今年度の出品作は、とてもすばらしい。例えば、中学生の作品



美郷中 1 年 佐藤斗亜
『頭の中』

細かな模様の一つ一つが独創的で、左の暗いスペースは、従来の安定した美意識にない、不安定さを表出させた新鮮な造形です。



中仙中 3 年 糸井優真
『宇宙探検』

時間をかけて制作していく持続的な研究は忍耐強い。発想、新技術への挑戦、個性的な色彩のコントロール等見事です。



角館中 3 年 小玉陽菜
『人生』

H.リードは、幼い頃からアクティブで適切な育ち方をした子供は、やがて素晴らしい『芸術的復活をする。』と言っています。近年にない程の良い作品です。

審査員長 秋田大学名誉教授 佐々木 良三